

東日本大震災の被災地（宮城県・岩手県）をめぐって 2011年5月2日～5日

1、はじめに～行方不明、言葉、無効

東日本大震災の被災地である宮城県仙台市若林区から岩手県久慈市までの沿岸部を野宿しながら車で4日かけて巡ってきて、その報告をしなければならぬと言葉を探し紡ぎだそうとするが、出てこない。これまで、報告書を作成するのに、多忙のため遅れることはあっても、言葉そのものが出てこなくて苦しむということはなかった。しかし、今回は違った。言葉が出てこない。いや、言葉を失った、というか、言葉自体が津波でさらわれてどこに行ってしまったのかわからない多くの行方不明者のように行方不明になったような感じなのだ。手応えのある確かな言葉が見つからない。これが今回のわたしの報告の中で、もっともなまな、一番根幹にある実感である。このことから逃げず、またごまかさず、この実感の自覚を前提にしつつ、あえて言葉を絞り出してみる。

言葉を失う、ということは、立場を失う、ということである。同時にまた、方法を失う、ということでもある。学問や科学やさまざまな表現が拠って立つ言葉や概念が、一つの立場であり、方法でしかないことを、今回の訪問と報告文の作成作業を通じて、いやというほど自覚させられた。

被災地に行く前に、今回の震災とそれに対応する政府や東京電力や保安院やマスコミの言葉や報道を聞き、読み、反芻しながら、言葉と情報の無力と重要性を考えていた。そして、今回の震災でもっとも深く問われるべきは、「防災・防衛」と「生存・生活」と「言葉・情報」ではないかと思った。そのうち、「防災・防衛」議論はある程度定量化できるし、またそうでなければ具体性がない。また、「生存・生活」もある程度、量化できる。水何リットルとか、電力何キロワットとか、食糧何カロリーとか、睡眠時間何時間だとか。だが、「情報」や「データ」はともかく、「言葉」は根本的に異なっている。定量化できる部分はわずかで、概念や意味内容もある質・内実を指し示し表象しようとする。それがうまくいくかどうかは別として。たとえば、家族や住処を亡くした被災者が発する「悲しい」とか、「痛い」とか、「辛い」とかという言葉（この場合、形容詞だが）をどのように量化できるだろうか。それを考えるだけで、気が遠くなる。そこにおいてはたらき、頼りになるのは、共感・共苦の力や想像力である。

被災地をめぐりながら、自分の位置が何なのか、はかりかねた。いや、そんな位置など幻想であり、虚構だったのかもしれない。宗教学や民俗学の研究者（わたしは宗教哲学者と呼

ばれることが多い)？ フリーランス神主(わたしはどこの神社にも属さない神主でもある)？ 神道ソングライター(わたしはまったく売れない神道シンガーソングライターでもある)？ 石笛・法螺貝・横笛奏者(わたしは若い頃から笛吹き東二である)？ 変わり者の被災地巡回者(わたしは子供の頃から還暦を過ぎた今に至るも変わり者とよく言われる)？

そのどれもが当てはまらない。津波で洗いざらい持って行かれてしまった被災地のように、自分の居場所も位置も社会的職分もみなすべて無効になり、存在論的身分が解除されつつ剥き出しになる。そんな、なんというか、存在論的不安と不定形の中にいた。

今回の津波は多くの行方不明者を出した。身元がわからずに、火葬や土葬に付きねばならない事態が発生した。「行方不明」ということが、単に身元不明と本人を証明する証拠品の有無とかという事態を超えてしまって、その存在論的基盤まで根こそぎさらっていった。そして、存在論的行方不明という実態を白日の下にさらしつづけ、それがその地を訪問している自分まで覆いつくしてきているような感じ。そこでは何の権限も身分も職能も成り立たない。ただ、あるとか、ないとか、という、むきだしのそれだけがそこに存在しているという事態。そしてそのような「行方不明」を励起しつづけているのが、これまた今なお行方の見えない福島第一原子力発電所の深刻な事故である。この今日も明日も見えない不測の状況の最大の震源地は原発事故である。

今回わたしは、宗教学や民俗学を学び研究している者として、その観点から主に被災地の宗教施設(神社・寺院・新宗教の教会)を訪問し、関係者と面談して、そこでの救援や救済にかかわる宗教活動を確認し、今後の支援一支援のかたちを探ることを訪問の主目的とし、実際、そのように行動した。そして、それによって、一定の成果・収穫(実にふさわしくない言葉だ!)もあった。だが、被災地を巡っている途中も、帰ってきてからも、「でも、それって、何？」という問いが繰り返し湧き起ってきて消えない。そのような、「成果」や「収穫」というもの事態が、根底から無効になるような、無力とかという以前の、「無効」感の圧倒的な押し寄せ。「無力」ではなく、「無効」という言葉がふさわしい事態。そこで、わたしはなすすべなく立ち尽くす。その一方で、この「なすすべのなさ」を正面から受け止め、生きることが必要だという内なる声が鳴り響くのを聴く。

何層にも及ぶこの「無効」の水圧を潜り抜けて、こうして時間をかけてようやく浮上させた言葉たちは、しかし、その時のわたしの感覚を表すものではないし、今なお「無効」を突き付けるさらされ感に適合するものでもない。あらゆる点で存在論的無効を突き付けられながらも、しかし、あえてその無効の中でも行方不明のモノを探そうとしつづける。そんな自分がある。それが生存というもののサガであり、生きるということのいつわりないすが

たなのかもしれない。

2、 2011年5月2日～「浪分神社」参拝から始まる

12時半に仙台駅で写真家の須田郡司氏と落ち合った。須田さんとは20年あまりの交友があり、国内外の聖地を共に巡礼してきた巡礼仲間である。須田さんは、世にも珍しい、50歳近くになる石の聖地の専門の写真家。古代の磐座など、巨石信仰に魅せられ、地域に根ざした、人と関わる石の信仰と文化をテーマに取材と撮影を続け、これまでにフォト・エッセイ集『VOICE OF STONE～聖なる石に出会う旅』（新紀元社、1999年）、『日本石巡礼』（日本経済新聞社、2008年）を上梓し、この5月には『世界石巡礼』（日本経済新聞社、2011年）を出す。彼は、2003年から2006年の3年間、車で北海道から沖縄まで日本の石の聖地を巡り、日本石巡礼を達成し、石文化を伝えるべく日本全国で「石の語りべ」（スライド&トーク）の活動を展開してきた（参照・須田氏HP：<http://www.sudagunji.com/>）。巨石・奇岩・怪石、大切に祀られてきた石、物語のある石。そんな「石の声」（VOICE OF STONE）を聴く耳を持った特異な写真家と2人で被災地を巡ることにしたのだ。

須田さんと打ち合わせを終え、今日と明日の朝一緒に行動するモノ学・感覚価値研究会やワザ学研究会の共同研究員の造形美術家近藤高弘氏と合流した。近藤氏とはこの17年、ともに「天河護摩壇野焼き講」など、野焼きワークを国内外で展開し、最近では近親者や自分の骨壺を自分で焼く「ホドキ（解器）ワーク」を共同提唱し実践してきた。そしてわたしは昨年、4年前に死んだ母のホドキを造り、2人でこれまでの15年間の「天河護摩壇野焼き講」の実践を中心にまとめた共著『火・水（KAMI）～新しい死生学への挑戦』（晃洋書房、2010年）を世に問うた（参照・近藤氏HP：<http://www.kondo-kyoto.com/taka/>）。

まず、最初に、仙台市出身の近藤夫人も一緒に、4人で仙台市若林区の「浪分神社」（仙台市若林区霞目2-15）に向かった。この神社のすぐ近く東隣りに広大な陸上自衛隊霞目駐屯地の飛行場があった。車のナビではよくわからないので、地元の人に道を聞いて、ようやく到達したら、神社の向かいにあるローソン付近と神社周辺に自衛隊の隊員が数人立っていた。彼らも浪分神社に参拝に来たのだろうか？

この浪分神社の創建は貞観地震と津波被害に由来するという。かつて平安時代の貞観11年（869年）にこのあたりは大地震と大津波にみまわれた。その貞観津波の後に浪分神社が建てられたと産経新聞や地元の河北新報は報道している。若林区に住む河北新報の記者はコラムにこう書いている。「仙台市若林区にあるわが家の近くに浪分神社という小さなお宮がある。数え切れないほど前を通っているのにここが発する警告を真摯に受け止めて

こなかった。痛恨の思いでいる▼869（貞観11）年に東北を襲った巨大地震「貞観地震」の際、ここまで大津波が押し寄せたと伝わる。これより海側は津波の危険地帯—子孫にそう伝えようと、先人が神社を建てたに違いない」と。貞観時代まではっきり創建の由緒が辿れるかどうか不分明だが、慶長年間の地震と津波の後ここに稲荷神社が移築されて、名前を浪分神社と変更したという伝承も残っている。ここにはまた、白馬にまたがった海神が大津波を南北に分けて鎮めたという伝説も伝わっている。

問題は、この神社の創建が貞観時代か慶長年間以降かという歴史的事実確認ではなく、津波の境界線上に創建されて「浪分神社」と命名されたという事実とそれが発信するメッセージである。ここでは、まちがいなく、浪分神社は防災ランドマークであり、先祖が残した津波という出来事の「場所の記憶」であった。そのような伝統文化の中で蓄積された伝承知を活かしきれなかったということ、このことが問題の一つである。



浪分神社（仙台市若林区）



仙台市若林区の被災地

浪分神社は海岸線よりおよそ5キロほど西の内陸にある。そこから真っ直ぐ東に向かうと堤防のような高さのある東沿岸道路にぶつかる。その道路の手前にも津波の痕が残っていたが、道路を潜るトンネルを抜けた途端、その光景に唖然とした。見渡すかぎりの平地に瓦礫の山が続いていたからである。「トンネルを抜けるとそこは雪国だった」という川端康

成の小説の文句ではないが、トンネルの手前と向こうとは世界が違った。被害の度合いがまるで異なっている。天と地ほどに。いや、天国と地獄ほどに、というべきか。津波はこの道路が防波堤になって、そこから先、浪分神社のある地点までは到達しなかったのである。

若林区の被災地の瓦礫の中に入ってすぐ鎮魂の念いを込めて法螺貝を吹き、般若心経を唱えた。そして、被災地区を一巡した。ほとんどの家屋が全壊して瓦礫となっている。そして、一軒ずつ仕切りをしてまとめられている。震災から一月半余り経っているので行方不明者の捜索も家屋の確認や片付けもある程度進んでいる。だが、その瓦礫地帯の空虚というのか空白というのか、がらんとした内実の無い荒涼感は言葉で言い表しがたいものがある。言葉に詰まる。どのようにも「適切」な表現など見い出せないという不到達感がある。

急いで、県庁に向かう。16時30分から宮城県県庁3階の県政記者会で「心の相談室」の記者会見が行われるからだ。この「心の相談室」は震災直後に、宮城県宗教法人連絡協議会（宗法連）と仙台市仏教会と仙台キリスト教連合が協力して4月いっぱい仙台市の葛岡斎場において「遺族への宗教的ケアと相談業務」を行なう場として「心の相談室」を開設したのが始まりであるという。そして震災後1ヶ月以上経って、改めて、関係機関や団体・ネットワークを広げて、「『死者への弔い』と『遺族へのケア』を中心的課題として、被災者の“伴走者”となりたいとの願いで始まった」この「心の相談室」は、「弔いとグリーフケアの総合」を主目的として再スタートすることになった。その「設立の理念」は次のようなものである。

「今回の大震災では、宮城県に限った死者だけでも2万人にのぼると予想されています。そのような状況に置いて、弔いからグリーフケア（悼む悲嘆へのケア）まで、一貫した切れ目のないご遺族に対する支援を行うことを目的に『心の相談室』は設立されました。これまでの日本では、死者の弔いは宗教者の責務と位置づけられてきました。しかし今回のように未曾有の大量死に直面した時、その弔いは宗教者にとって、宗教教派を越えて広く取り組むべき大きな課題となっているものと思われまます。もちろん弔いの儀礼が継続的に行われる一方で、残された遺族に対しては悲嘆ケア、さらには生活の再編に至る包括的な支援が必要になってくることは言うまでもありません。その意味で、ご家族に不慮の死者が出てしまったご遺族に対しては、宗教者だけではなく、悲嘆ケアの専門家、さらには医療や生活支援の専門家が一体となって支援していかなければなりません。『こころの相談室』では、宗教者による弔いを手始めに、ご遺族に対する包括的な支援を提供する仕組みを構築していきます。」

「心の相談室」は、会長に吉永馨氏（東北大学名誉教授：仙台ターミナルケアを考える会会長・医師）、室長に岡部健氏（医療法人社団爽秋会理事長・東北大学医学部教授・医師）、

事務局長に鈴木岩弓氏（東北大学教授・宗教学者）が就任している。関連する主な団体には、宮城県宗教学者連絡協議会（宗法連）、世界宗教者平和会議日本委員会、仙台キリスト教連合、仙台的のちの電話、反貧困みやぎネットワークなどが入っている。1998年にWHO執行理事会に提案された「健康の定義」（Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity）に準拠した四分野、a. 医療問題（岡部医院）、b. メンタルヘルス（いのちの電話）、c. 生活問題（反貧困ネットワーク）、d. 宗教の問題（宮城県宗教学者連絡協議会）、に対応していくとする。「スピリチュアル」という言葉が「健康(Health)」の定義に入るかどうか、この執行理事会提案は議論がストップしたままになっているようであるが、しかし、あえて、そのストップした健康の定義を踏まえて、「スピリチュアル」を加えた「心の相談室」を開設したことを評価したいし、また今後とも注目し、支援していきたいと思う（「健康」の定義と「スピリチュアリティ」との関係については、加藤清【精神科医・精神医学者】・鎌田東二『靈性の時代』春秋社、2000年、を参照されたい）。



宮城県庁県政記者室での記者会見の様子

「スピリチュアル」を加えた「健康」観とともに、ここで重要なもう一つの特徴は、異なった宗教や宗派の宗教者が協力し合っている点だ。宮城県宗教学者連絡協議会の会長は天理教多賀城教会長の齋藤軍記氏で、記者会見には、齋藤氏のほか、天台宗北目山聖賢院の四竈亮澄住職ともう一方の僧侶と塩竈神社筆頭禰宜の野口次郎氏とキリスト教の牧師が同席

していた。そして司会進行役を務めていたのが、仙台キリスト教連合事務局・日本基督教団仙台市民教会牧師の神学博士川上直哉氏であった。これらの面々が中心になって、医療関係者らとともに、超宗教・超宗派で活動している。弔いからグリーフケアまでの総合的ケアを行なおうとするこの宗教者間の協力のあり方に注目したい。

記者会見後、「心の相談室」の事務局となっている、旧知の東北大学文学部宗教学教室の鈴木岩弓教授、近藤夫妻、須田さんと一緒に夕食を共にしながら情報交換した。鈴木岩弓氏は宗教民俗学を専攻し、宮城県名取市や福島県沿岸部などでも死生観などの民俗調査を行っている。その地域を訪問して、面識のある家を訪ねてもご家族が避難してか、亡くなっ
てか、どこにいるか不明であることがしばしばだという。その安否も十分確かめられない状態が
いまだ続いているようだ。鈴木さんは仙台から南には何度か行ったが、石巻から北の女川や
気仙沼や岩手県にはまだ訪ねていないという。鈴木さんは地震が襲ってきた時研究室に
いたが、あまり揺れが激しいのでドアの取っ手に掴まって自分の体が揺れるのを防いだ
そうだ。その日、自宅に帰るのも大変だったという。東京でも大量の「帰宅難民」が出た
日だ。震源地にもっとも近い仙台市ではその揺れもその後の行動もさぞかし「前例」のない「
未曾有」の臨機応変によるしかなかっただろう。

1 時間ほど鈴木さんたちと話をし、須田さんと七ヶ浜町に向かった。須田さんとは 20
年ほど前から共に聖地巡礼を時々共にする間柄で、17 年前、1994 年にアイルランドやイ
ギリスのケルトの地を巡った間柄でもある。が、もちろん、寝袋持参で被災地の周辺で車中泊
しながら巡るのは二人とも初めての経験だ。途中のスーパーで洗顔などすませ、翌朝以降の
食材を購入して、とにかく、訪ねたい場所の一つである七ヶ浜町の鼻節神社の近くにある君
ヶ丘公園に向かった。途中、真っ暗な夜道の側溝のあたりに瓦礫が積み上げられているよう
に見えた。海に近い七ヶ浜は被害が大きかった地区なので、もうその被災地区に入っている
のかもしれない。その夜は、君ヶ丘公園の駐車場で寝た。

3、 2011年5月3日～七ヶ浜・鼻節神社から雄勝町・葉山神社まで

翌朝、白じんでくると同時に目が覚めた。早朝 4 時半。鶯の鳴き声が聴こえる。京都で
も七ヶ浜でも鶯は鶯だと思えば、少し心が落ち着いてくる。君ヶ丘公園の上に登り、松島湾
を望みながら、大祓詞と般若心経と真言を唱える。そして、展望台に登って、岬の周辺の湾
を一望する。遠くてよく見えないが、高台の家々は何ともないが、谷間の家々が倒壊したり、
瓦礫になっているように見える。道に迷いながら鼻節神社に向かう。

車でぐるりと走ってみると、やはり、谷間の地区は北方と南方の両方の湾から津波が押し

寄せたようで、相当激しい被害にあっている。壊滅的な状態だ。1階の中身が根こそぎ持って行かれて、肚の中が空洞になっているような民家、全壊の家屋、ひしゃげて横転したままの何台もの自動車、瓦礫が無秩序に散乱している。この散乱はもちろん津波の爪痕なのだろうが、どのような流体力学が引き起こした結果なのか？ 自然現象とは起こるべくして起こった運動であり、力学的現象なのだろうが、ここにはどのような秩序があるのか。散乱というしかない、倒壊の現場に息を呑む。



七ヶ浜町の被災地区



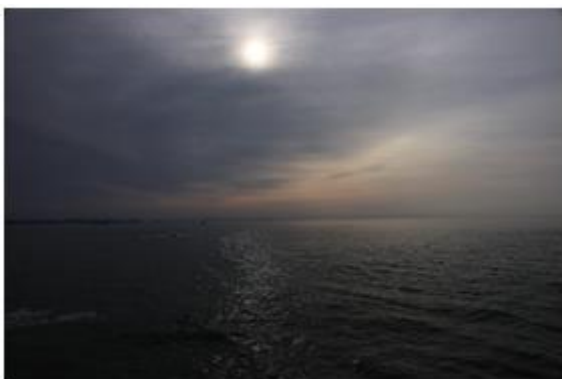
延喜式内・鼻節神社

鼻節神社は二度目の参拝になる。十年近く前、伊勢の猿田彦神社の宇治土公貞明宮司（当時、故人）一行とともに参拝したことがある。わたしはこの15年ほど、猿田彦大神という古い神の研究をしてきたが、この鼻節神社には「岐神（ふなどのかみ）」とされる猿田彦大神が祀られている（参照：鎌田東二編『謎のサルタヒコ』創元社、1997年、『隠された神サルタヒコ』大和書房、1999年、『ウズメとサルタヒコの神話学』大和書房、2000年、『サルタヒコの旅』創元社、2001年）

「鼻節」とは、「端」「切れ目」「境」、「the edge of the world」という意味であろう。実際に、岬の突端に鼻節神社はある。縁起によれば、鼻節神社という名称は猿田彦大神の鼻が高く節があったことにちなんでつけられたというが、「突端」という地形によるネーミングであると思われる。神社とは、「場所の記憶」にして記念碑やランドマークとして

の性格があるので、神社の立地条件は祭神や神社名に反映していることがしばしばある。たとえば、分水点に立地する「水分（みくまり）神社」など。

すぐ右下が断崖になっていて波が打ち寄せる音が聴こえてくる鼻節神社の本殿前で石笛・法螺貝・横笛の奉奏をする。本殿には津波の被害はない。岬の谷間には波は押し寄せても、ここまで高浪は押し寄せてくることはなかったのだ。神社の周りを巡り、岬の周囲を周遊してみる。以前、宇治土公宮司たちと来た折、吠崎の岩礁で日向ぼっこをした記憶がある。そのポイントを探る。考えていた以上にぐりと回り込んで、その岩礁に出た。太平洋が一望できる。ここから東には島一つない。ここに3月11日の午後3時過ぎに高浪が押し寄せた。が、鼻節神社を呑み込むことはなく、低地の谷間を一瞬にして呑み込んだ。猿田彦大神は海の神とも塩土の翁とも同体とされるが、この現象を神道家はどのように受け止めるだろうか。



鼻節神社の岬の御来光



ご来光に向かって法螺貝を奉奏

わたしはふと須田さんに言っていた。「禊をしようか」。だが、わたしたちはその岩礁の海に入って禊を行なう気持ちになれなかった。そこが断崖で危なかったからではない。そんな危険ならこれまで何度もおかしてきた。そうではなく、そこにはすでに目に視えない放射性物質が浸透し始めているという事実がわたしたちの禊を躊躇させたのだ。日本の海も川

も滝も、これまでほぼどこでも禊できるほど美しかった。きれいだった。しかし、3・11以後、そのような自然浄化力を期待することができない時代に入った。わたしたちは、『風の谷のナウシカ』でいう「巨神兵」による破壊と汚染後の“「腐海」の時代”を生きているのだ。「腐海とともに生きる」、それがこれからの深刻な課題である。かつてのような、素朴な、禊による身心の浄化という精神文化の物質的基盤は喪われた。それによって、霊的次元でどのような打撃があるか。だが、それよりもさらに深刻なのは、海に生きる生物たちであり、それを捕獲して生業を成り立たせている漁師さんたちだ。そして、その海山で捕れた初物を恭しく地元の神社の神々に奉獻してきたのが、等身大の素朴な神社信仰であった。そのような、生態的なサークルがここで分断されたのだ。その痛みが鋭く深く突き刺さってくる。

鼻節神社からふたたび七ヶ浜町の被災地を抜けて塩竈神社へ向かう。塩釜の地も比較的被害は少なかった。湾の構造や家屋を立てている地形が関係しているのだろうか。8時半に社務所をお訪ねすると、昨日、記者会見の場で野口次郎塩竈神社筆頭禰宜に伝えてある。社務所に向かう前に、共に延喜式内社である志波彦神社と塩竈神社の両社を参拝する。2つの延喜式内社がここでは並置される形で鎮座している。両社の本殿前で法螺貝の奉奏。塩竈神社前で近藤夫妻と合流して参拝。



志波彦神社



塩竈神社

社務所に行って、野口禰宜さんから塩釜周辺の震災後の状況を聞いた。塩釜では普段から津波対策が講じられており、大きな被害はなかったという。塩釜市では普段からの「想定」や「備え」が一定の効果を発揮したということだろう。猿田彦大神フォーラムで助成した造形美術家の小島誠氏の実家が地元ではよく知られている小島蒲鉾店で、安否を確認すると、本人は元気で家の手伝いをしており、今日は仙台の方にボランティアに行っているという。

野口禰宜から、昨日の記者会見の背景をなす宮城県宗教法人連絡協議会の普段からの活動などを聞く。ここは昔から宗教者間の仲がよい土地柄らしい。これはいかなる「文化」であろうか？ そのような宗教者間の親密さが下地としてあったために、「心の相談室」の活動も生まれ、身元不明者に対する共同葬儀の奉仕が行なわれるようになり、合同での祈りが捧げられたという。4月27日・28日の2日間にわたり、神道、仏教、キリスト教の3宗教の聖職者が葛原斎場で身元不明の死者一体一体にそれぞれ神道の弔詞、仏教の般若心経の読経、キリストの讃美歌の詠唱を行なったという。身元不明の方の属する宗教・宗派がわからないので、このような方式が生まれたという。その話を聞いて、このような宗教協力が行なわれていることにひとすじの光明を見る思いがした。もちろん、中には無神論や無信仰の方もいるだろう。だが、それはそれとして、身元不明の死者を前にして、宗教者としてできる最善の弔いをしたいという思いは十分理解できる。死者もそのことで腹を立てることもないだろう。野口禰宜さんは、「生きている人たちへのケアと、亡くなった人たちへのケアの両方が必要なのです」と強調した。そして、亡くなった方々への慰霊も、個人の慰霊と地域の慰霊の両方が必要だと主張された。

松島駅で近藤夫妻と別れ、須田さんと松島の街並みを抜けてゆく。のどかな、美しい松島の風景。天橋立や巖島と並んで日本三景の一つとされるだけあって、湾内の小島群の点在が愛らしい。その小島が盾になったのだろうか。なぜか、ここにはほとんど被害がなく、観光客も例年のゴールデンウィークよりは少ないかもしれないが、それなりに訪れていた。今後のためにも、各地域における被害の度合いの違いが、どのような原理というか、法則性に基づいて発生したのか、緻密な検証が必要だと思った。



5月3日、朝の松島湾



石巻市の被災地

だがしかし、車が石巻に入ると風景が一変した。何キロも続く廃墟となってしまった街並み。高台には建物が残っている。しかし、低地の港湾部は全面薙ぎ倒されたような瓦礫の山山山。4月の初めに、「これを見て言葉を失った。絶句した。戦場のようなだった。地獄のようなだった」というピースボートのボランティアの若者の声を聞いたが、この地に立ってみて、その言葉が誇張表現ではなかったと腑に落ちてくる。言葉がない。確かに、廃墟化していても、瓦礫ではあっても、津波が去った後の街はある。だがそれは、以前の生活空間とは全く異なる生の匂いのしない空間。生が突然断絶させられた空間であった。そこに立ち尽くしても、言葉が立ち上がってくることはない。「うーん」とか「ふう〜」とかという低い唸り声しか出てこない。意味のある音の列が口から消えてしまったかのようだ。



石巻市の被災地



石巻市の被災地



石巻市の被災地



石巻市の被災地の上空にかかる虹の帯

一番被害の大きかった港湾地区の道路脇には巨大タンクが横転している。何かの間違いか、それとも故意に置かれたインスタレーションなのかわからないような非現実感にとられる。ある被災地区の上空に、虹の帯が上空に現れた。それは「一」のようにも見えたが、半円形の虹ではない、少し両端が跳ね上がったような水平の虹の形に奇異な感じを抱いた。

その後、立正佼成会石巻教会を訪ねた。安井教会長さんは、福島県南相馬市に出かけて留守だと聞いていたので、御本尊をお参りをさせていただいた後、教会の信徒5名ほどの方々のお話をうかがった。1960年のチリ地震による最大6メートルの大津波が襲ってきた時、小学生だった女性の方が、「すぐ後ろまで津波が追っかけてくるのを走って逃げたのよ」と語ってくれた。熱心な活動家らしい女性は、「今度の地震で、いろいろと話を聞いてくれたり、声をかけてくれたりして、その『つながり』がいちばんうれしかったし、たすかった。力になりました」と実感を込めて話してくれたのが心に残った。どのような新宗教の活動においても、普段から信徒間の親密なコミュニケーションやケアが行なわれていることが多く、そのような普段の活動から来る「つながり」の再確認がこのような非常時により強化されたといえる。立正佼成会では、全国の会員の方々から少しずつお米を集め「米百俵・托鉢布教による真心支援米」として被災地に届けているが、埼玉教会から送られた支援米が置かれていたのが目についた。埼玉県大宮市で15年間過ごしたわたしにとっては懐かしいような嬉しいような気持だった。



立正佼成会石巻教会の「真心支援米」



各地から届いた支援物資

時刻が正午を過ぎたので、お昼を食べていくように勧められたが、申し訳ないので辞退したものの、とても親切に何度も強く勧められたので、それでは、ありがたくおつゆだけいただきます、とお言葉に甘えてご一緒させていただくことにした。結局、おつゆだけではなく、大根などの煮物やおかずもいただくことになった。大変申し訳なくも、ありがたく、うれしく、こころ温まる時間だったが、そこで一緒に昼食を食べていた若い女性に、年配の女性が「お家はどうか？」と訊いたら、「お姉ちゃんが見つからなくて……」と突然堰を切ったように涙を流し始めたのを見て、痛々しくもこの傷がどのような過程で癒えていくのか見通すことができなかった。気軽に言葉もかけることができず、黙ってその場で共に過ごすしかなかった。

石巻市の市街を抜けて、原子力発電所を持つ女川町に向かった。女川街道の峠を抜けると、女川漁港が開けてくるのだが、国道398号線の両脇の家屋がビルがほとんど全壊になっていた。高台にあって被害を免れた町立病院が避難所になっている。そこに、車や人が忙しく出入りしている。その高台から街を一望できる。3階建てのビルの屋上に車がさかさまに乗っかっているのが見える。10メートル近い高浪に押し流されたのだろうか。ここでも、絶句する。



女川町



女川町

女川町から雄勝町に向かう途中、リアスブルーラインの桜はほぼ満開だった。春になれば花は咲く。杏も桜も咲き誇る。だが、その花を愛でる精神的余裕もそれを支える物質的基盤も失われた。そこで、生活再建や復旧・復興を進める前に、どのようにして心を立て直すのか。建物以上に壊れやすいところのある「こころ」、そのはたらきをどう再建できるのか。生活再建の原動力となる心自体の再建が必要だが、それもまだ実に微妙で複雑な問題や状況を抱え込んでいるように見えた。一つは、被害が広域でありすぎること。第二に、個々・此処の事例がかなり異なっていること、複雑であること。第三に、この被害の全貌が精確につかめず、包括的な連絡・連携やメタレベルでのネットワークなどがまだまだ構築されていないこと。そして、復旧・復興を足元から脅かし続ける福島原発の事故がもたらす日々の状況変化などなど。

いろいろな問題点や問題構造が渦を巻いて、ほとんどみんながその中に巻き込まれているような事態。このような事態はかつてなかった。有吉佐和子の『複合汚染』ではないが、今回の災害は、自然災害と人的災害が複雑に掛け合わされた「複合大災害」である。その「複合」性は確かに「未曾有」の事態であろう。

雄勝町も被害が甚大だった。町の公民館の2階の屋根の上にバスが1/3ほどもお尻を出して乗っかっている超現実的な風景にぶつかった。その近くで道と場所を聞きながら、雄勝総合支所に行き着き、仮設のプレハブで安否確認などを取り扱う窓口の職員に雄勝神楽の関係者にお会いしたい旨を伝えた。水浜という、われわれがすでに通過してきた集落の避難所に雄勝法印神楽保存会の副会長さんが避難しているとのことで、すぐに連絡をとってくれた。そして、直接本人と電話で話すことができたので、急ぎ水浜地区の避難所に向かった。



雄勝町公民館



雄勝町の被災地区

集落はほぼ壊滅しており、わずかに国道沿いの民家や施設が残っていた。その一つである水浜保育所が避難所になっている。そこに身を寄せている雄勝法印神楽保存会副会長の伊藤博夫さんから今回の震災と雄勝神楽の歴史や現状を聞いた。伊藤さんによると、保存会の高橋仁夫会長は今なお行方不明だという。そして、神楽師たちが使う神楽面や装束のほとんどが海に流されてしまったとのことであった。

この国の無形民俗文化財に指定されている雄勝法印神楽は、古くは「大乘神楽」とか「山伏神楽」と称されて、修験者たちが一子相伝で伝えていたという。そのことは、雄勝町大浜の延喜式内社の石神社（いそのじんじゃ）と葉山神社の千葉宮司家に伝わる『御神楽之大事』（元文4年・1739年）によって知られるが、その修験道は山形県の出羽三山信仰の拠点である羽黒修験道の系統であるらしい。現在伝承されている演目は、初矢、両天、三天、四天、岩戸開、魔王退治、道祖、日本武尊、蛭児、橋引、鬼門、荒神舞、宇賀玉、国譲、獅子など、28番あり、その内容の多くは『古事記』や『日本書紀』の神話伝承を題材にしたものである。

雄勝町は法印神楽のパンフレットの冒頭の説明書きによると、「宮城県の北東部に位置し、太平洋に面したリアス式海岸特有の変化に富んだ自然景観はすばらしく、『南三陸・金華山 国定公園』及び『硯上山・万石浦県立自然公園』の指定を受けている。／豊かな太平洋が育む海の幸は豊富で、ウニやアワビ等の他、生鮮ホタテ貝は県内一の生産量を誇る。／又六百年の歴史を誇る雄勝硯は、国の伝統的工芸品に指定され、全国生産量の90%を産出しており、伊達家御用達の硯を産した『御止山』が今なお名を留めている。／加えて慶長18年、藩祖伊達政宗公が家臣、支倉六右衛門常長を大使として遠くローマまで派遣した遣欧使節船は500tの木造ガレオン船で、その『伊達の黒船』建造の地が本町『呉壺』であり、海の幸豊かな、歴史と伝統の町である」とあった。誰が見ても美しい港湾部に点々と広がる漁港を中心とした裕福な集落群であった。漁労を中心にして成立してきた沿岸部の町。そこに、優美でもあり勇壮でもある雄勝法印神楽が伝わっているのである。わたしがこの雄勝法印神楽のことを知ったのは、つい最近のことで、漫画家の岡野玲子さんの発言からだった。4月23日、NPO東京自由大学（学長：海野和三郎東京大学名誉教授、理事長：鎌田東二）主催のシンポジウム「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」（なかのZERO小ホール；<http://homepage2.nifty.com/jiyudaigaku/>）で、岡野玲子さんは、雄勝法印神楽の14番目の演目「橋引」に魅了され、震災後、気になってインターネットで情報を探っているうちに雄勝神楽の神楽師の方と知り合うことになり、メールのやりとりを始めたらしい。家もすべてのものも失ったその若い神楽師は、つい最近、神楽で使う篠笛を買って、湾と町を見下ろす丘の上でその笛を吹いて、復興を祈念したという。岡野玲子さんは、近々始める『新陰陽師』の連載の冒頭で、雄勝法印神楽の「橋引」の和歌、「人ならば 契りも深き 伊会杉の 今も情けを 忘れがたらむ」の歌と絵を描くつもりだと述べていた。岡野さんは、シンポジウム会場でも支援を呼びかけ、集まった義援金を雄勝法印神楽保存会に送って支援をしていくとのことであった。

神楽を含め、日本の伝統文化を研究し、いづれか実践もしてきたわたしにとって、岡野玲子さんの発言によって知ったこの雄勝法印神楽の行く末は日本の伝統文化の未来を占う一つの大切な事例だと思い、この縁を頼りにどんな「支縁」のありようができるか、模索する

ためにもこの地を訪ねなければならぬと強く思ったのだった。それこそが、今のわたしにできる「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」の一つの具体的なかたちではないかと考えたのだった。

伊藤博夫副会長さんは、わたしたちを被災された自宅に案内してくれ、雄勝法印神楽の津波の被害を免れたパンフレットを取り出して来てくれた。常識的に考えれば、伊藤さんのお宅はおそらく標高15メートル近くはある国道沿いのすぐ下で、ここまで津波が押し寄せたとは到底信じがたかった。家はほぼまるまるそのまま残っているが、しかし、1階中ほどまで浸水したので、もうこの状態を改築するくらいでは住めないかもしれないとのことだった。ここでも何と返答していいかわからず、「ええ」とか「そうですか」とかと、間の抜けた相槌とも言えぬ言葉を発するしかなかった。伊藤さんは、3月11日に地元の中学校の卒業式があり、来賓として招かれて出席し、帰宅して地震と津波に襲われた。被災者450世帯の内、210戸の仮設住宅が建設される計画であるが、もう自分の家に戻ることができないかもしれないと先行きの見通しが定かではないことを語っていた。神楽を習っていた高校生も転向せざるを得ない者がいる一方で、しかし、海の人には自分の浜でなければ仕事ができないので、自分の住んでいる浜にそれぞれ強い愛着を持っている。

雄勝町には、船越、大須、熊沢、桑浜、立浜、大浜、下雄勝、明神、荒、名振、小島、水浜、雄勝、分浜の14の地区があり、それぞれの地区に船魂神社、八幡神社、五十鈴神社、白銀神社、北野神社、葉山神社、熊野神社、塩釜神社、熊野神社、山祇神社、熊野神社、作楽神社、新山神社、五十鈴神社があり、各神社の祭礼時に神楽が奉納されるが、毎年神楽を奉納する神社と3～4年毎に奉納する神社に分かれている。14の神社の内、3つが熊野神社であることも、興味深かった。やはり、黒潮の流れの中にあるのだ。船ダマ神社も塩釜神社も八幡神社もみな海の神々である。伊藤さんの住んでいる水浜地区には木花咲耶姫神（このはなさくやひめのかみ）を祀る作楽（さくら）神社が鎮座している。その神社の入口の階段は伊藤さんのお宅よりも少し道を下ったところにあるので、階段の途中まで津波で被害を受け、階段を上ることができなかつたので、お参りすることができず、下から遥拝するほかなかった。

伊藤さんに見せていただいた雄勝法印神楽のパンフレットに磐座とおぼしき巨石の写真があった。石の聖地の写真を撮り続けている須田さんがその写真にすぐ反応し、どこにある岩か確認したところ、それは、標高352メートルの石峰山の山頂にある御神体として巨岩を祀る延喜式内社の石（いその）神社の写真だった。昔は、石峰権現社と呼ばれたという。夕刻、わたしたちは石神社に登拝するべく石神社の鎮座する雄勝町大浜へ道を急いだ。山頂の奥宮が石神社で、その麓の里宮が葉山神社といい、湾の対岸の大浜にあるという。気づかず、だいたい行き過ぎたところで、また引き返してお参りした葉山神社は狛犬も社殿も津波に

運ばれて破損していた。



葉山神社

石神社への登山道がよくわからず、そのあたりを探っていると、一台の車が止まり、降りてきたのが、代々、石神社と葉山神社の宮司職を務めてきた千葉宮司家の千葉修司宮司さんだった。伊藤さんは山頂まで「15分くらいでしょう」と語っていたが、千葉宮司さんに聞くと、とても15分では登れず、40～50分か、1時間はかかるという。もう夕方6時を過ぎているので、今日の登拝は無理だとあきらめ、新北上大橋が津波で崩落していて通れないので、大きく迂回して釣石神社に向かい、そのあたりで車を停めて車中泊をしようと考えた。だが、北上川を大きく迂回せざるを得ず、道も鉄板を敷き詰めた河川敷を走るなど、思った以上に時間がかかり、途中の町でガソリンを入れ、開店していた数少ない中華料理屋で晩御飯を食べて、道の駅「上品の郷」に車を停めて、昨夜同様、車のバックシートを倒し、寝袋を2つ敷いて霊柩車の中に並んだ棺のような格好で眠ったのだった。

4、 2011年5月4日～雄勝町・石神社から遠野・早池峰山山麓まで

早朝、4時に目覚めてすぐ出発。まだ薄暗い中、北上川を下流に走る。4時半には葉山神社に到着。昨日、千葉修司宮司さんに教えてもらった道を辿る。山道は週1階か2週間に1回、比叡山に登拝する自称「東山修験道」を実践しているので、慣れている。東北の山であろうが、京都の山であろうが、山は山だ。石峰山石神社へと向かった。40分ほどで石神社に到着する。



延喜式内社・石神社への参道



石神社鳥居



石神社の御神体の磐座

大祓詞、般若心経を唱え、石笛、横笛、法螺貝を奉奏。その間に、朝日が森の中に差し込んで、磐座を浮かび上がらせる。実に神秘的な光景だった。そのあと、左側から回り込んで、山頂に進むと尾根道に出た。そこには、巨岩に跨ったまことに艶めかしい檜の巨木があった。その優美なエロティシズムに酔った。ここにも、神霊の降臨を感得する文化が保持されていた。最近、和歌山県新宮市に鎮座する熊野三山の一つ、速玉大社の上野宮司さんが参拝に訪れ、この磐座まで案内すると、磐座を見上げて感嘆し、「ここに来ると、どんな人でも神秘的な霊性を感じるでしょう。お参りできてよかったです」と述懐したとのことであった。



山頂の岩と檜の木

わたしも速玉大社の上野宮司とまったく同様の感想を抱いた。日本の神社信仰の原型的風景がここにはある。宮崎駿の『となりのトトロ』におけるトトロが棲む森のような。この石神社の祭神は「多岐津比売命（たぎつひめのみこと）」とされる。タギツヒメ（湍津姫）とは、宗像大社の三柱の女神（たぎりひめ、たぎつひめ、いちきしまひめ）の中の一神で、宗像市大島の中津宮に祀られている女神であり、とりわけ海運漁業者の信仰が篤い。その宗像の神の一神がこの磐座に降臨したとされるのだ。昔、湖の巨岩が湾内に行く船の中から望見でき、ランドマークになっていたこともあるのかもしれない。それが道しるべともなり、精神的安定剤ともなり、海の神に護られているという思いを胸に漁労に従事していたのかもしれない。そして、大漁の際には真っ先にこの延喜式内社の由緒ある社に収穫物の魚を奉献したのであろう。そしてそこで、優美・勇壮なる雄勝法印神楽を舞った……。

山頂の磐座群をゆっくり巡拝したあと、山道を下りた。登る時と降りる時で別の道を行ったが、一部、凄い崩落している崖があり、滑落するように下りていった。降りて、葉山神社奥の遥拝鳥居からお礼の遥拝をしているところに、千葉宮司さんが出てきて「お早いですね！」と声をかけられ、わたしたちに缶コーヒーを持って来てくださった。被災地を巡りながら、被災者の方々からさまざまなかたちで分け与えていただいたものがある。ありがたく、こころして拝受した。

ふたたび、北上川を遡り、迂回して橋を渡り、道が津波により分断され大きな被害を受けているので、ガタガタ道を走りながら、釣石神社を探した。が、なかなか見つからなかった。ほぼその地域が北上川まで押し寄せてきた津波に一気に呑み込まれてしまったから、風景が一変していて、数年前に訪れたことのある須田さんもまったく様相が変化していてわからなかったのだ。到着すると、かつて社務所と境内があった場所は津波にさらわれ地盤沈下をして水が溜まって大きな池になっている。だが、釣石は無事だった。以前と変わらぬ雄姿を見せていた。須田さんは、被災地巡回に先だって、釣石神社の釣石がどのような状態にあるのかネットで調べてみたそうだ。そこには、釣石は無事だったと書いてあった。そればかりではなく、釣石神社の上まで駆け上がって命が助かった人がいるとのことだった。この釣石は1978年の宮城県沖地震にも耐えたことから「落ちない石」として知られるようになり、この正月には受験生ら約1万人もの参拝客を集めたそうだ。民間信仰というのは大変面白い。人々の素朴な願望や安心を得るための身近な回路になっている。それだけでなく、ランドマークになったり、災害時の緊急避難所となるなど、具体的で実用的な機能も果たしている。



釣石神社御神体



陽石（中央上）と陰石（左手前）

と茅の輪

地元の民間信仰においては、この釣石は陽石（男根石）とされ、その下に陰石（女陰石）があつて、陰陽二対の和合の石として信仰されている。石は重量が重くて根が深いのか、地震でも津波でもびくともしなかったが、陰石すぐ右横の入口に設置された茅の輪は折れまがり、灯籠も崩れ落ちている。わたしたちは下からも上からも参拝し、周辺を歩いた。だが、ここにはかつて、社務所だけでなく、民家が密集していたというが、一軒の家も残ってはいなかった。池のようになった大きな水たまりに山影が写り、その中にぼつねんと座椅子が1個、浮いていた。



釣石神社下の被災地区

次に気仙沼市の宝鏡寺に向かった。気仙沼の名刹であるこのお寺は、「シャーマニズムの未来～見えないモノの声を聴くワザ」シンポジウムの基調講演をお願いした宗教人類学者の佐々木宏幹氏（駒澤大学名誉教授）が育ったところで、金仙山圓光宝鏡寺というのが、正式名で、曹洞宗に属する。現在の住職の菊地秀道氏は、佐々木宏幹氏の弟弟子で、佐々木氏のお祖父さんが住職を務めていたという。菊地住職の話では、気仙沼市宇川原崎という、少し高台にあるこのあたりや旧市街地にはほとんど津波や火災の被害はなかったが、湾岸に近い新市街地には大きな被害があったという。そこで地元の人たちは、昔からの生活空間の範囲内で生活していればこれほど大きな被害にはあわなかつただろうと考えているとのことだった。このあたりは、大変難しいところだろう。「開発」とか人口増加とか産業の発達とか、さまざまな新展開の過程で居住地域が拡張されていく。仙台市若林区も、全国の沿岸埋立地域もそうである。そのような住み方にどのようなリスクがあつて、いかなる普段からの備えや対策があるか、ということも、大きくかかわってくる。「災害は忘れたころにやってくる」。そうだとすると、その中で、どこまで心構えや対策を練って備えているかも、被害を最小限に抑えるために必要なことである。生活空間の構築というのは、さまざまな要因で多様に変化していく。その変化は、「防災・防衛」とか、「生存・生活」とかという観点から見てどうであるのか、居住者も行政も常にその観点を忘れてはならないということを今回の大震災は痛いほど突きつけた。



気仙沼市金仙山宝鏡寺

宝鏡寺から市街に降りて気仙沼市南町の金光教気仙沼教会を訪ねた。わたしは、2006年から「モノ学・感覚価値研究会」という研究会をやっているが、そのメンバーの一人の地理学者土居浩さん（ものづくり大学准教授）の実家が金光教の教会で、気仙沼の教会を紹介してくれたのだ。弟の土居智さんが今、そこでボランティア活動をしているとのことだった。教会を訪ねると、土居智さんたちがわれわれの到着を待っていてくれ、お参りのあと、教会長の奥原志郎氏や土居智からいろいろと話をうかがうことができた。震災直後には100名近くの方が避難されたというが、今はだいぶ減っているようだ。避難された方の中には信徒ではない方々もいたので、奥原教会長さんは気を遣って朝のお勤め（祈りの儀式）を静かに行っていたそうだが、その様子を見ていた信徒でない方が仕事に復帰してから一升瓶の献酒などを持ってお参りにきてくれたとのことだった。その気持ちがとてもうれしかったという。苦しみを分かち合う中で現れるさまざまな思いやりのところが人の心を動かし、支え、励まし、勇気づけるということだ。当たり前といえば当たり前のことであろうが、その当たり前が貴重であり、重要だということである。当たり前が失われているかに思える時に、それがどれほど安心や落ち着きを与えるか、測り知れない。それほど、人の心は微妙でデリケートなのである。

金光教気仙沼教会のすぐ隣に紫神社がある。そこをお参りして菅原秀紘宮司さんのお話をうかがった。他にも北野神社や羽黒神社など三社の兼務をしているという宮司さんの話では、鳥居のところまで津波が押し寄せ、この下の民家もビルもみな水浸しになり、家が全壊したり、流されたりして、被災直後から無事だったこの紫神社は避難所となり、自主的に炊き出しが始まったという。氏子の寿司屋さんから120キロの米が届き、温かいものが食べられるので、近くの中学校に避難した親子などもこの炊き出しを食べにきていたという。今でも100食は出しているとか。ここでは自治会（町内会）の役員のはたらきもあって、一人ひとりが一役を持って何らかの仕事を受け持つようになったという。料理係や清掃係やお風呂係や体操係などなど。この自発的な被災者たち自身の生活協力や役割分担が緊急

時の助け合い的な自治を生み出したようで、そこでお会いした方々の顔は明るく、リラックスしているようだった。どのような困難の中でも、知恵を出し合い、力を出し合い、相乗作用的に協力関係が築けると、思いもよらぬ雰囲気やよい人間関係が生まれることがあるということだろう。阪神淡路大震災の時も、そのような相互扶助がうまく行った例をいろいろと聞いたことがある。

その後、陸前高田へ向かった。ここも国道45号線が分断されていて、気仙川を渡る橋も津波で押し流されていて、大きく迂回せざるをえなかった。今回の津波は、リアス式の、特に入り口の狭い入り江や細長い湾や河川沿いを猛然と駆け上がってきた。そのさまは、あたかも、ホースの先を強く握ってすぼめると勢いよく水が噴出するのにも似て、狭くなったところに流れ込む速度と水位の高さと破壊力は凄まじいものだった。陸前高田はまさにそのような狭まった深い湾の突き当りのところに位置し、さらにその津波の流水がそのままストレートに真っ直ぐに流れ込んだ気仙川を逆流する地形や河川の向きと流れ方である。これまで多くの三陸海岸沿岸部の壊滅した集落群を見続けてきたわれわれも、陸前高田の市街地の壊滅状態を目の当たりにして絶句した。地盤沈下も激しく、海拔ゼロメートル地帯になっているのだろうか、津波が去って1ヶ月以上が経っていても海水が引く気配がない。相当な範囲がはまだ水浸しになっている。





陸前高田市の被災地

海沿いに向かって建っている5階建ての団地は、かつてはウォーターフロントで見晴らしもよかっただろう。だが、今回の津波で4階まで壊滅した。確かに、1階から2階、2階から3階、3階から4階に至るにつれて、被害の度合いは少なくなっている。窓枠やサッシが上階に行くほど残っている。だがそれでも、4階までは完全にさらわれている。が、一転して、5階はほぼ完全に無事のようにだった。被害がなかった。とすれば、ここで5階と屋上に駆け上がった人たちは助かっただろう。海に没して陸の孤島のようになっただろうけれども、寒さと飢えをしのげばなんとか命長らえることはできただろう。しかし、この広大な平地の緊急避難地や2～3階のビルに登って大丈夫だろうと避難した人々は、予想以上の高波にのみ込まれてあっという間に押し流されてしまったにちがいない。その津波の押し寄せてくるさまと被害の状況が手に取るように見えてくる。痛い。考えることも、見えてくるものも、すべてが痛い。

訪問先に定めていた慈恩寺（臨済宗妙心寺派）がある広田地区は、広田湾と大野湾が両方から迫ってきて、ちょうど、瓢箪の胴のくびれのようになっていて、しかも、「広田」の地名が示しているように、広くて農耕に適した低地が広がっている。そこに、両サイドから津波が押し寄せてきたからたまらない。広田湾からの津波と大野湾からの津波が広田地区の低地で合流し、激しくぶつかった。そしてそのまま竜巻のように、巨大な噴水のように何十メートルも上空に押し上げられていったという。高台に避難した地域の人たちはそのこの世のものとは思えぬ光景を目撃したという。

こうして、この広田地区は道路が寸断されて、陸の孤島になり、物資が3日間ほどまったく届かなかったという。本堂をお参りし、横笛と法螺貝を奉奏し、住職の古山敬光氏に話をうかがった。古山住職さんによると、4日目に自衛隊のヘリコプターで物資が届いた時は、みんな「万歳！」と言って喜んだそうだ。「本当に自衛隊様様でした」と住職は語った。「これまで、阪神淡路大震災や新潟の中越地震の時に、特別にボランティアや支援活動を行なったわけではないが、しかし、今回の被災に際して、多くの方々がボランティアにやってきて

くれた。また、自衛隊は朝夕2回、必ず給水車で水を届けてくれ、何か足りないものがないか、訊ねてくれる。ほんとうに、人は人によってしか救われない、ということがよくわかりました」と実感を込めて語ってくれた。私たちが訪れた時、住職さんは北海道から来たボランティアの人たち数名とストーブを囲んで親しげに話をされていた。この北海道からのボランティアの人たちは炊き出しをしているのだが、2回目のボランティア訪問だという。



慈恩寺（陸前高田市広田地区）



慈恩寺山門前の看板

慈恩寺を後にして、わたしたちは釜石に向かった。陸前高田ほどではないと思ったが、釜石市街もさうとう深刻な被害状況だった。まず何よりも安否確認のために、市役所に向かった。が、その周辺は壊滅的な被害を受けていたためか、市役所では日常業務は行われていず、駅の近くのビルの中に役所機能を移転しているとのことで、暗くなる前に、急ぎ、そこに向かった。もう午後6時を過ぎている。



わたしは15年ほど前に國學院大學文学部で「日本倫理思想史」や「倫理学」の非常勤講師をしていた時に、わたしの授業を受講していた学生・末永和磨君の安否が知りたかった。彼は、1998年8月8日に、神戸のメリケンパークで行われた「神戸からの祈り」という阪神淡路大震災の鎮魂の祈りと芸能を中心としたイベントの最初に釜石の「虎舞」をお姉さんと二人で踊ってくれたのだ。その年は、「寅年」だったので、釜石の「虎舞」が縁起がいいだろうと、オープニングを飾ってもらったのだ。その時確か、お姉さんは釜石市役所に勤めていたと言っていたように記憶していた。そこで、釜石市役所を訪ねた。だが、時間が遅いためか、担当の人はおらず、別の係の方に頼みこんで安否確認をしてもらった。「虎舞」をしている末永和磨君と言っても、たくさんの方がいろいろな地域で虎舞をやっているようなので、よくわからなかったのだろう。避難所名簿の中に末永君の名前はなかった。死亡者名簿にもその名はなかった。どこかで生きていてくれることを祈りながら、名刺を渡し、もし何かわかったら連絡をくださいと係の人に頼んだ。その日、末永君の安否はわからずじまいだった。（だが、5月6日、末永君本人から避難して無事釜石に住んでいるとの連絡が入った。彼は今、釜石市周辺の被災地の瓦礫撤去などの仕事をしている。）

ここで、釜石の「虎舞」について2つの新聞記事を紹介しておきたい。1つは、3月26日付け朝日新聞夕刊の次の記事。

<東北地方の伝統や信仰が被災者たちの心の支えになっている。>

「ジョイワナ、ジョイワナ」。黒光りする虎の面が激しく舞い、黄色と黒のしま模様の布が左右にはためく。



岩手県陸前高田市の大石地区。周囲に倒壊した家屋や逆さになった消防車が無造作に散らばる公民館の前で23日、伝統行事「虎舞い」が披露された。本来は、家々を訪ね、暴れ回って邪気を払う小正月の風習だ。虎を操った左官業の斉藤実さん（61）は言う。

「避難所においても気分が落ち込むだけだもの。おらほの守り神をがれきの下で眠らせるわけにはいかないっぺよ」

160戸あった大石地区は震災で40戸ほどに減り、住民350人のうち80人が行方不明になった。虎舞い用の面や衣装が保管されていた公民館も水没した。七夕祭りで使う高さ8メートルの山車も骨組みが傾き、竹飾りがひしゃげた。震災から3日後、大工の金野光晃さん（66）は公民館や山車の修繕に取りかかった。「ここ10年で祭りがまたやれるとは思ってねえ。でも、ちょっこりちょっこりやれば、孫やひ孫の代では復活するべ。そのときのために残しておくっぺよ」

今では10～70代までの男女10人ほどが手伝い、金づちやノコギリの音を響かせている。多くは家族を失い、家を流され、避難所で暮らしている人たちだ。家族4人を失った星野功子さん（75）は「いろんなものが流されたけど、地域の絆は残っていることを確かめたいのよ」。（朝日新聞夕刊、2011年3月26日、矢島大輔記者）

この記事の署名者に覚えがあった。7年ほど前、わたしが早稲田大学法学部で「宗教学」の非常勤講師をしていた時、受講生の中にいた。数百人もいる受講生の中でなぜ彼の名前を覚えているかという、わたしが沖縄の神の島と言われる久高島の話をした時、その島の宗教に興味を持って、彼が属している水嶋ゼミの学生をオーガナイズして1週間ほど沖縄本島と久高島の調査に行き、すばらしい報告書を仕上げ持ってきてくれたからである。4年生だった彼は、優秀な成績で卒業し、朝日新聞社に入社し、今は秋田支局に勤務しながら、東京で組織された朝日新聞の震災特別報道班にも属して取材活動をしている。3月25日ごろ、ちょうどこの記事が新聞に掲載される直前だったと思うが、沖縄の宮古島の離島の大神島などの御嶽や聖地調査に出かけていたわたしは、同行していた「久高オデッセイ」の映画監督大重潤一郎氏と沖縄大学専任講師の映像民俗学者で助監督の須藤義人氏と一緒に晩

御飯を食べながら、矢島大輔氏の話となり、突然宮古島から秋田の彼のところまで電話したのだった。彼は被災地取材して大変落ち込んでいる様子だった。被害状況の大きさにどのような表現もついて行かなかったのだろう。そして、彼は被災地から甦ってくる伝統文化・伝統芸能の記事を書いて、再生を願ったのだろう。矢島君は書いた。「虎舞い」は「地域の絆」だと。その「きずな」があるかぎり、地域は再生するだろうと願いを込めながら……。

もう一つの記事は、次の河北新報の記事である。

虎舞、大地跳ねる 岩手・釜石



満開の桜の下、力強く繰り広げられた虎舞＝ 4日、釜石市の旧釜石一中体育館前

東日本大震災の被災者を元気づけようと、岩手県釜石市に伝わる郷土芸能、虎舞の保存団体「尾崎青友会」が24日、同市の避難所となっている旧釜石一中体育館前で勇壮な舞を披露した。

青友会は震災で会員2人が亡くなったという。この日は約20人が参加し、会員の一人が「天国に行った人や元気に生きている皆さんのために踊ります。多くの死を無駄にしないためにも頑張りましょう」とあいさつ。軽快なおはやしや太鼓に合わせ、虎にふんした踊り手が舞った。

自宅と店が津波で流された釜石市港町の美容院経営寄松久美子さん(59)は「家が流されても泣かなかったのに、舞を見たら涙が出た。私たちも頑張るしかない」と涙をぬぐった。

虎舞の由来は諸説あり、同会関係者によると、祭りやお祝いの際、航海の安全を祈って踊られる。青友会の坂本照人会長(38)は「被災者の方々に少しでも元気になってほしい」と話した。(河北新報2011年04月25日)

わたしは、4月28日(木)に行なわれた「京都大学大規模自然災害対策・復興全学大会議」の際に提出した資料の中で、「これから何ができるか、何をしたいか?」という項目に次のように書いた。

①伝統文化の心と体のワザ（瞑想・武道・気功など）を活用したメンタルヘルスケア

②伝統文化および民俗芸能・芸術、聖地文化・癒し空間を活用した復興と再生

③脱原発社会の社会デザイン・世直し

<21 世紀文明のありかた。その中での日本文明の位置とありかた。そこにおける、伝統文化（祭り、芸能、芸道、宗教など）の継承と活かし方。自然と人間と文明との関係の中での「生態智」の再発見・再評価と再構築。聖地などの安らぎや浄化をもたらす「癒し空間」の活かし方。>

「雄勝法印神楽」や「虎舞」などの「伝統文化の心と体のワザ」、「また民俗芸能」や「聖地文化・癒し空間」がどのような地域復興や再生の力になるか、その再評価・再活用と支援のあり方を探りたいと被災地巡回の旅に出たのだった。そのため、まだ30代や20代の若い世代である末永和磨君や矢島大輔君がこの被災現場の中からどのような思想と行動を生み出してくるか、自分自身に問いかけつつ、同時に彼らの未来に希望を見出したかったのである。ここから生まれてくる「何か」にかけたかったのである。

釜石を出発する頃にはすでに日はとっぷりと暮れていた。釜石からひたすら西に向かい、遠野を経由して、この日、最後に向かったのは岩手県宮古市の小国の公民館であった。そこに、前掲の沖縄大学の須藤義人氏がボランティア学生と教員39名とともに来ているのだ。4月末に募集したとかで、まだ大学1年生の若者たちは被災地でどのようなボランティア活動をしたらいいのか、とまどっているようだったが、2日、3日と経つにつれて、自分で何をすればよいかが見えてきて、それから町の人たちとの交流や関係もうまく進むようになっていったと須藤氏は述べていた。おそらく、最初は教員も学生も大槌町の町の人もどう切り結んだらいいのか、よくわからなかっただろう。だが、このようなある種無手勝流の若者の飛び込みボランティアのような支援活動から「支援」とは何か、深く学び、気づき、教えられるものが相互にあるに違いないとも思った。

旧知の須藤義人氏が、沖縄大学人文学部長の木村英起氏や同学部福祉文化学科教授の金城一雄氏や同学科教授で医師の山代寛氏を紹介してくれた。わたしもかつて沖縄大学で交流授業を行なった経験がある。沖縄大学の一行は6日間、泥だしや支援物資の仕分けなどをしたという。ボランティアの最終日の夜、沖縄以来、1ヶ月ぶりに須藤君に会ったのだが、そこに、朝日新聞社の記者の矢島大輔君も加わった。旅の途中で電話して、小国で会おうと誘ったら、来てくれたのだ。矢島君が早稲田大学を卒業してもう5年ほどになるが、それ以来の再会である。わたしたちは小国の公民館で落ち合い、ともにその足で早池峰山の麓のタイマグラの山小屋へ向かった。須藤義人氏は4月に、大重潤一郎氏とともに撮影した「久高オデッセイ」と題する記録映画の思想的背景と進行過程を文字でドキュメントした『久高オ

デッセイ～遙かなる記録の旅』（晃洋書房）という本を出したばかりで、これからを期待できる若き学徒だ。こころの未来研究センターでわたしが研究代表を務めるプロジェクト「こころとモノをつなぐワザの研究」の共同研究員にもなってくれている。須藤君の紹介で、緩和医療などにも関わっている山代先生たちと話し込んだ。早池峰の夜は深く、寒い。その夜わたしたちはタイマグラの山小屋前の駐車場で車中泊したが、あまりの寒さに目が覚めてしまい、寝袋の中でもう1枚コートを着込んだが、急激な寒さのためか風邪を引いてしまい、早朝、頭痛で目が覚めたのだった。

5、 2011年5月5日～早池峰から久慈市・岩泉・龍泉洞まで

5月5日、早朝4時に起きて、長い山越をして大槌町に降りた。途中、ご来光の当たった美しい早池峰山を望み見、峠から2度、法螺貝を吹き鳴らした。早池峰山には一度登拝したことがある。柳田國男の『遠野物語』は早池峰山麓の民間伝承の集成である。



ご来光を受けて輝く早池峰山

だが、山岳地帯から沿岸部に降りて大槌町に近づくと、その被害の大きさが見えてきた。ここでは町役場も壊滅したと聞いている。5時前の朝靄の中で、川沿いに何か捜索しているような様子の男性がいた。こんなに朝早くから何を探しているのだろうか？ 行方不明と捜索、この2つの言葉がジンジン痛む頭の中で鳴り響く。



大

槌町

大槌町から北上して宮古市街へ向かう。宮古にはこれまで3度来ているので、少しは勝手知ったる町であるはずだが、どこがどこやら、何が何やら、まったくわからなかった。以前、通ったであろう道も、倒壊した家屋や打ち上げられた観光船の異様な光景の中に埋没して、完全に行方不明化している。観光名所の浄土ヶ浜に行ってみた。その岬の高台に建っているホテルは自衛隊と機動隊の臨時駐屯地になっていた。埼玉県警の大型車が7台ほど並び、隊員が朝の仕事前の点呼を取っていた。浄土ヶ浜に降りたが、人っ子一人いない。観光名所だが、実に淋しい。静かに規則的に波が打ち寄せるばかりだ。



宮古市の被災地



田老町の防波堤

宮古から田老町に向かう。この町の堤防が「津波田老」とも「万里の長城」とも呼ばれて、世界最強の防波堤と言われていたものだ。だが、今回の大津波は、この2重の堤防を壊し、呑み込んで、田老町を壊滅させた。世界最強の万里の長城も今回の自然災害にはひとたまりもなかった。人間が自信満々で作ったものをあつけなく自然が突き崩す。災害列島日本は、その繰り返しを学習してきたはずだ。自然の動きとはたらきには人知の及ばぬ「想定外」もありうると「想定」し、その力とはたらきに畏怖畏敬の念を捧げてきたのが、災害列島の「生態智」ではなかったか。

次に、もう40年近く前、学生時分に一人、岩泉町の鍾乳洞の洞窟の龍泉洞に行くために、バスの乗り継ぎのためだけに宿泊した小本町を訪れた。だが、まったく40年前の面影はなかった。その時は、バス停前の民宿に泊まったのだが、その民宿のおかみさんが、「娘の京子ちゃんが久慈で働いているのよ」と実に嬉しそうに話してくれたことをはっきりとおぼえている。それから、裏の浜に出たことも記憶にあった。今回、そのバス停を探したが、道路も家屋もほとんど全部新しくなっていて様相が変わり、まったく以前の光景と重ね合わせることができなかった。裏の浜に出てみて、湾の形態だけがうっすらと過去の記憶と照合するように思った。

そこからさらに北上し、沿岸部の集落を確認しつつ野田町に入った。ここもまた浜に近いところが平地なので、そのエリアは壊滅的な被害に遭っている。だが、少し西側の内陸寄りの平地の神社の鳥居の一角から西は、まったくといっていいほど被害がない。仙台市若林区の「浪分神社」のように、この「愛宕神社」が「浪分け」の機能を果たしているかのようだった。もちろん、本殿の鎮座している高台は無事であり、そこに逃げ込んだ人たちはみな助かっただろう。わたしの親しい友人の京都造形芸術大学教授の地球科学者の原田憲一氏は、九州の災害多発地域の地質研究をして、災害多発地域にあっても神社が災害を免れていることが多いということを実証的に示している。神社には巨岩や巨木があることが多く、石神社や釣石神社の御神体がそうであるように、地震などでも崩れることなく、長期的に安定した「杜」を維持してきているところが多い。ということは、そこが経験的に安定した地盤であり、その「鎮守の森」は生物多様性が保持されてきた生態学的センターであるために、いざという時の避難所にもなるということである。「災害」に対する伝統文化の拠点としての神社が持つメッセージ性とランドマーク性と警告はもっと注意されていい点であろう。



小本町の崩れた堤防と湾



野田町の被災地区と愛宕神社

野田町から最後の目的地の久慈市に入る。どういうわけか、久慈の街は被害が少なかった。なぜなのか。専門家の検証を知りたいところだ。ガマロのように湾の口が大きいために久慈市の被害は少なかったのだろうか。確かに、港湾地域は津波でやられている。しかし、街の大半はそのまま、日常生活が普通に行われているようだった。この巡回の旅の最後の最後で少しほっとする街並みを見ることができた。わたしたち二人が歩いた350キロほどの海岸線で、松島と久慈だけが被害が少なかったように思う。それ以外のほとんどが、程度の差はあれ、壊滅的な被害を受けていた。松島と久慈が普通の生活を維持してくれているということが周辺地域の一つの安心回路にもなるのではないかと思った。町も一つの町単体で存在しているわけではない。隣の集落や、集落群のネットワークによって機能している。だからこそ、道路が大事になる。水も物資もすべて道路なしには運べない。その道路が大きく分断されると、孤立化した沿岸部や岬の突端の集落が点在することになる。それをつなぐ複数の「道」のバックアップ体制が必要ではないだろうか。そのような「災害・防衛」対策を今後中長期的に講じる必要があるだろう。

久慈の港に立っていると、そこに乗用車が横付けされて、老夫婦がなかよく降りてきた。話をしてみると、久慈市内に住んでいる方だという。お二人は、3月11日の地震と津波があつて以来、海に近づくことができなかったという。2ヶ月近くなって初めて彼らは久慈の海を見に港に来ることができた。それほど、地震や津波の恐怖と不安が離れることがなかったということだ。お二人も、久慈の街が奇跡的に災害から免れていることに驚きを隠さなかった。テレビや新聞などの報道で三陸海岸の惨状を見聞きしていれば、久慈の街の状態が嘘のように思えてくるかもしれない。しかしそれでも、海に近づくことができなかった、という心の状態には胸を突かれるものがあった。



久慈港

老夫婦と別れて、わたしたちは久慈の街を後にし、県道に入って岩泉町にある安家洞と龍泉洞という2つの鍾乳洞の洞窟と地底湖を見学した。40年近く前に1度龍泉洞に来て、そのあまりの美しさと神秘さに目を眩り、一篇のファンタジーのような詩を書いたことがあった。その時に、久慈と岩泉という地名がわたしの中で神秘的な結合を生んだ。久慈と松島、壊滅的な被害の中で2つの町が陸の孤島の島宇宙のように生き延びている。そこを經由しつつ、三陸全体の動脈がさらに強くつながり、蘇り、毛細血管に氣息が流れ込んで活気を取り戻すことをどんなに願うかわからない。

この4日間、わたしたちは被災地の中にいた。そこで、鎮魂とか供養とかを考えても、あるいは葬儀一つとっても、どこからどのようにすればいいのか、方途もワザも見出すことができなかった。今、必要なことは、比喩的に言えば、詰まった動脈を甦らせ、毛細血管の先端にまで血を送り込むことだろう。だが、そこから復旧・復興への長い道のりが待っているとしても、これから先、これよりも大きい自然災害も想定しつつ、どのような備えと対策と覚悟を持つ必要があるのだろうか。被災地の中で、これまでのように、素朴に素直に祈りを捧げることができない自分がいた。大祓詞や般若心経や真言などの伝統的な聖なる詩句がこの被災地の多くの亡くなった方々や生きている方々にどのように響き、届くのか、その行方も見えず、確信も持てなかった。祈りや祭りが大事だということは、自身の生き方と人生観をかけてよくよくわかっている。しかし、それだけですまない、すまされない、終わらない。「それから？ 何をするの？」という声が聴こえてくるのだ。しかし、何から、何を、どうすればいいのか、確たるものを見出すことができない。そんな気持ちを抱いたまま、帰路に着いた。

おわりに～さらなる「生態智」を求めて

この数年、わたしの中でのキーワードは「生態智」であった。「身体知」や「暗黙知」や「感性・感覚」という言葉も、その「生態智」に収斂され、集約されると思ってきた。3月11日の14時46分、東日本大震災が起こった瞬間、わたしは和歌山県那智町の熊野三山の一つの聖地である那智大社・青岸渡寺（西国三十三ヶ所の一番札所）の境内の那智の大滝の前に立っていた。那智の大滝が爆音を立てて流れているので、揺らぎも何も感じることはなかった。わからなかった。その日の地震と津波のことを知ったのは、沖縄からシンポジウムのためにその日熊野本宮にやってきた沖縄大学や古謝南城市長や大重潤一郎氏や須藤義人氏を通してだった。沖縄から来た彼らから今回の地震と津波のことを初めて聞くという変な経路の中で、またふたたび、ボランティアに来ている沖縄大学や須藤義人氏と小国や大槌町で再会した。これも、確率的には奇縁というほかないもののように思えた。この「めぐり」というもの、それを問い返さずにはいられなかった。

震災前に、わたしは老舗の宗教新聞『中外日報』紙の一面のリレーコラム「時感断想」に「パワースポットブームを考える」と題する短文を4回連載した。2月22日に掲載した3回目と3月8日に掲載した4回目の文章を本報告の最後に引いておきたい。

第3回 「天河火間」と「解器」制作（『中外日報』2011年2月22日掲載）

1995年、阪神淡路大震災とオウム真理教事件が起こった。その衝撃を受けて、翌年の1996年に「天河護摩壇野焼き講」を結成した。以来15年、呼びかけ人のわたしが講元を、京都山科在住の陶芸家で造形美術家の近藤高弘氏が野焼き先達を務めてきた。

縄文時代からの野焼きと密教や修験道の護摩を現代に結び合わせたものが「護摩壇野焼き」である。それをもくもくと15年続けてくることによって、天然と人工との絶妙の相互作用やバランスをからだで理解するようになった。人工と天然が手を携えて一つの器に結実する。人工にして、それを越えた天然。造化の妙とはこのことかと深く納得する。

祈りとともに粘土で練り上げた各自の器を、毎年2月3日に天河大辨財天社で行われる節分祭の「護摩壇野焼き」の火で焼き清め、それを持ち帰って日常の器にしたり、神社に奉納したりしてきた。そして昨年、世界一美しい穴窯「天河火間（てんかわかま）」を天の川沿いの禊殿（鎮魂殿）の前に造営し、わたしたちの活動は次のステージに入った。

この数年、わたしたちは自分自身や近親者の骨壺を自分の手で作り、天河の護摩壇の中で焼き上げるという、「解器（ホドキ）ワーク」を始めているのである。

神道は森羅万象を生成発展せしめる宇宙根源の生成力を「ムスビ」ととらえ、その存在とはたらきに畏怖畏敬と讃仰の念を捧げた。だがその素朴やいのちへの讃美・讃嘆は、「生老病死」という生活世界の実態の中でさまざまな苦悩に直面し、やがて死の中に「ほどかれ」てゆく。そのいのちへの讃美と苦悩の全体を、ムスビとホドキの全容をそのままに見つめ、受け容れ、生きること。その一つのプロセスとして、自分の骨壺を自分で作り、護摩壇野焼きの中で焼き上げるという試み、すなわち「ホドキ・ワーク」を始めたのだ。

神道と仏教、ムスビとホドキ、生と死、誕生と往生、生きる力と死ぬ力、この両極を見つめ、総合・統合していくワザワギのワーク＝講へと「天河護摩壇野焼き講」を深化させたいと考えたのである。それが「ホドキ・ワーク」である。少子高齢化社会を迎えている今、このワーク＝講は重要な意味と力を持つと確信している。

新しい神仏共働のモデルともなるこの「ホドキ・ワーク」を、21世紀の「スピリチュアル・デザイン」ないし「スピリチュアル・ケア」として静かに深化させていきたい。

(参考文献：鎌田東二・近藤高弘『火・水(KAMI)－新しい死生学への挑戦』晃洋書房、2010年)

第4回 生態智の探究（『中外日報』2011年3月8日掲載）

弘法大師空海は天河大辨財天社で七千座の護摩を焚き、その中から「灰練り弁才天像」をつくったという。その「灰練り弁才天像」はほぼ同様のものが天河大辨財天社にも江ノ島神社にも所蔵されていて、江ノ島では神宝館に展示されている。

空海が護摩の中から弁才天像を焼き上げたという伝承がわたしたちの「天河護摩壇野焼き講」の活動を進めていくうえでのモデルとなり、牽引役となった。空海が現代に生きていたら、密教の中に脳科学もスピリチュアリズムもアートも音楽もそれこそ「曼荼羅」的にすべて取り込んでいただろう。

「曼荼羅」は本質具有・輪円具足を意味するが、あらゆるものを取り込みながら本質とのつながりを表出する知恵は、別の言葉で言えば「生態智」の探究と表現であるといえよう。この「生態智(Ecosophia, ecological wisdom)」を、わたしは「自然に対する深く慎ましい畏怖・畏敬の念に基づく、暮らしの中での鋭敏な観察と経験によって練り上げられた、自然と人工との持続可能な創造的バランス維持システムの知恵」であると捉え、それはパワースポットの源流である聖地や癒し空間や古代からのさまざまな生活文化のワザの中に保持されてきていると考えている。聖地は、「聖なるモノの示現するヌミノーゼ的な体験が引き起こされる場所」であるが、そこには「生態智」と呼ぶほかない知恵と力が宿っているがゆえに、そこで長らく祈りや祭りや籠りや参拝や神事やイニシエーションなどの儀礼や修行（瞑想・滝行・山岳跋涉等）が行われてきたのである。

そのような場所は、太古の記憶を場所の記憶として蔵した聖なるものの出現地にして、魂を異界へと飛ばし、つなぎ、浄化し、活性化するタマフリ・タマシヅメの力を持つ。人間にとって根源的ないのちと美と聖性に関わる宇宙的調和と神話的時間を感じとる場処である。このような聖地は「性地（エロス空間）にして政地（政治空間）」でもある。つまり、生殖を含む生命力を喚起し、活性化するのみならず、人々の念や思いや信仰を集め、情報とエネルギーの集積回路となる「性地」としての特性があるために、そこは政治的な統治や支配にとっても非常に重要な場所、すなわち「政地」となったのである。最澄や空海が開いた比叡山や高野山はそのような総合的な神聖（性・政）空間であった。

そのような「生態智」を深く宿す「聖地」を、21世紀の「霊性のコモンズ（公共財）」

として生かす道をさらに実践的に探究していきたい。

東日本大震災の直前にわたしが書いていた文章である。そしてその2ヶ月後、わたしは苦吟しつつ、難渋しつつ、この文章をようやくの思いでここまで書き継いだ。その言葉はわたしの感覚をそのまま正直に伝えるものではない。ニヒリズムとは違うが、もっともっとアナキーともいえるような感情や感覚が被災現場を通過している時に自分の中に流れていた。それを、簡単に言葉にすることができない。また、それをあえて言葉にする必要があるだろうかと反問してしまう。言いよどみ、逡巡を繰り返しながら、何度も上書きと削除の末にこの報告文を手放すことにする。

わたしははまだ、どんなポジティブな言葉や感情も発信することができない。そんな状態にならないし、なれない。しかし、打ち沈んで、鬱々たる状態に引き籠っているのでもない。言いよどみ、発散できないさまざまなものたちを抱え込んで生きる。ただ、それだけのこと。

安家洞の洞窟に向かう三陸の山中でわたしは不思議な民家を見た。それが須田郡司氏が撮影してくれた次の民家である。



安家洞と龍泉洞近くの山中の民

家

誰も住んではいないのだろう廃屋のような民家の茅葺の屋根が苔生していて、そこから大きい松が1本すくと伸びている。その近くには数本の小さな松やそれ以外の植物も顔を出していた。土が無くても茅葺の屋根を土壌代わりにして生きている。嗚呼、生命というものは、生きるということは、このようなもの・ことなのだろうか。どこにあっても、どんな状況でも、どんな境遇でも、その状況や境遇を受け容れつつそこで生きる。今ここを生きる。ただ、それだけがある。それだけでよい。そんな、なんでもありかよ～、とでもいうよ

うな、少し拍子抜けするような、こわばりや緊張がほどけるような、けなげというのか、しぶといというのか、したたか・しなやかというのか、何とっていいかわからない「想定外」の開放がここにはあった。そして、強く思ったのだった。まだまだ探り当てていない「生態智」の血脈や鉦脈がある、あるに違いない。絶対に、在る。そんな、根拠のない確信とともに、わたしたちは東北自動車道をすっ飛ばして出発地点の仙台に向かっていた。

【 * 本報告の写真は朝日新聞と河北新報の記事の写真の他は、すべて、写真家・須田郡司氏の撮影によるものである。須田氏からの写真提供を心より感謝申し上げたい。またこの報告文は、2011年5月20日、九州の古社で延喜式内社の宗像大社の辺津宮と中津宮を参拝した後、沖ノ島の特別参拝に出かける前に大島の民宿で書き上げることができたことも感謝したい。大島の中津宮の御祭神は、本報告で取り上げた石巻市雄勝町の石神社の御祭神と同体の湍津姫神（たぎつひめのかみ。石神社の表記では、多岐津比売命・たぎつひめのみこと）で、中津宮はその一番大元の元宮に当たる。】

2011年5月20日了